

# 現代語訳での法要式・読経の口語訳の試みについての考察

堀田 泰寛

## 一、はじめに

現代の日本社会は既存の価値観が大きく変化し、個々人と家族間の関係、生活様式も一変しつつある。このような社会構造の変化に際し、日本の仏教教団の多くは、伝統的な宗教的儀礼（以下、法要式）を執り行う上で、新しい技術、新しい生活スタイルとの間に生じるギャップに直面している。

特にみられる問題として、近年、檀信徒、特に若年層を中心に、漢文の読経を中心とした伝統的な法要式の内容がわからないという声が見られる。このため、法要式の伝統性を保持しつつも、僧侶と檀信徒、法要の参列者の間でより現代に即した形での法要の内容と意義を共有し、宗教的な共感を深めるための試みが必要であると考えられる。しかし、一方では従来の法要式からの口語訳中心の法要へ試みの一般化・普遍化にはなお課題が多いという意見が存在する。

今回の発表では読経の口語訳を中心とした現代語による法要式の一例を取り上げ、その必要性を鑑みつつ、伝統的な法要式との差異を考察し、なぜ現代語訳による法要式には課題が多いと思われるのか、その原因を言語学的な視点から考察する。

## 二、問題の所在

現在に至るまで伝統的な仏教教団の法要式では、原則として各宗派の定めた儀式作法に則り、漢文、もしくは漢文書き下し文（以下、訓読）による読経、文語体による読み上げが行われてきた。しかし、戦後は、社会の中で漢文および訓読、文語体が日常の場で用いられること、目に触れることがほとんどなくなり、その内容を檀信徒や参列者が理解することが困難となっている。そのような中で「法要式の内容がわからない」「退屈である」のような意見は、決して少なくないのが現状である。例えば、以下のような意見がある。

「聞いて意味不明の漢文読経のままでもいいのか」

キリスト教の葬儀に参列し「意味が分かる言葉」を死者に捧げられることを体験すると、なんと聞いても意味がわからないお経に対して、強烈な違和感が沸き上がるのです。お葬式の時は、死の衝撃がありますから、まだ気になりませんが、一周忌や三回忌、七回忌の時などに聞くお経は意味不明で、その時間は、足のしびれと共に、我慢する時間になっていると、僕には感じられます。お坊さんの中にはお経が終わったあとの法話でいろいろ伝えようとしてくれる人がいます。けれど「聖なる言葉」は厳かな「聖なる時間」の中で語られるから意味があるのです。私たちの心にしみ入るのです。「受け入れ難い死を受け入れる」という精神の苦行は「聖なる時間」に行われるものなのです。というか、その時間にしか、できないものでしょう。

（鴻上尚史「仏教界に期待すること」『月刊住職』令和元年三月号）

この意見に対しては、多くの示唆が含まれている。法要の内容が理解できないことの本質的な問題は何か。それは、

故人や遺族と、法要を取り仕切る僧侶との間で、厳かな「聖なる時間」が共有されないことにある。僧侶が儀式を行っている間、参列者はその儀式的意義や、説かれている教義の内容についてではなく、「足の痛み」や、「焼香の順番」について思いを巡らしている、というのである。

参列者と儀礼を行う聖職者との間で「聖なる時間」の「共有」を行うための方策の一つとして、法要式の中で経文や要句の内容を、参列者に理解してもらうことが必要であるのではないかという視点が浮かび上がる。そのためには、読経の内容を法要の中で、全てではないにしても、日常的に使う言葉を用いて遺族に伝えるという試みに至る。

一方で、読経の内容を法要で意味が分かるように伝えるためには、読み上げる「経典」そのものを書き換える、手を加えるということが必要となる。しかし、仏教伝来以来、連綿と続けられてきた「読経」そのものに変更を加えることは大変な責任、および、その宗派の歴史性、独自性から、信仰上の重大な問題をはらんでいることも否めない。

### 三、問題への取り組み

#### ■現代語による法要の試み

今回、実際に現代語化による法要式を試みとして、自坊（京都一部 成就山満願寺）に於いて、二〇二〇年春の彼岸法要、および秋の彼岸法要において、住職による伝統的な法要式を執り行った。一方で、研究者により、口語訳を中心とした法要を同じ参列者に対して行い、二つの法要式に対し、その感想を聞き取り調査した。

法要の形式としては、千葉県由緒寺院 日本寺 清瀬日草住職が作成した『法華経読誦要集（口語訳付）』に則り行った。以下に資料として一部を抜粋する。

【由緒寺院日本寺住職清瀬日草による現代語による法要】

法要開始前に、すべての参列者に『法華経読誦要集（口語訳付）』を配布する。

※法要式の各章の句頭のみ導師独唱、次の句、節よりすべて参加者と共に読み上げる。  
句頭の番号は、各章の原文に対応する。

### 一、道場観（御題目三唱のち、原文を読み上げる）

- ① 当に知るべし、是の処は即ち是れ道場なり。
- ② 諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、
- ③ 諸佛此に於て法輪を転じ、
- ④ 諸佛此に於て般涅槃したもう。

※次に、それぞれの行に対応した現代語訳をお唱えする。

- ① 私たちは唯今、南無妙法蓮華経とお唱えました。この時、この場所がお題目の道場、人生の心の道場となつたのです。
- ② このお題目の道場に於いて、全ての仏様がお悟りを開かれています。
- ③ 同時に、ここで仏様は教えを説かれています。
- ④ つまり、私たちがお題目を信じ唱えているこの娑婆世界こそ、全ての仏様の安住の地なのです。

### 二、読経

『法華経読誦要集』の該当する現代語訳部分のみを読み上げる。木魚等の法具による拍子は打たない。金鐘は適宜

打つ。

## 妙法蓮華經方便品第二

① ついに釈尊はご自身の悟りの内容を、ありのままに説き明かすには、どうしたら良いかを、深く深く考えられた後、心静かに目を開けられて、弟子の中で知恵第一と言われた舍利弗に向かって話し始められました。

② 私ばかりでなく仏の知恵というものは、あなた方には想像もできないほど、深く広いものです。

③ あなた方には仏の悟りを、そのまま説いても解らないので、最初はあなた方の心に従って方便の教えを説いてから、本心を明かそうとしました。ところがあなた方は、その方便の真意すらわからないのですから、真実の世界にも入れません。

## 妙法蓮華經如来寿量品第十六 (妙法蓮華經方便品第二と同様)

三、祖訓 必要に応じて、別ページの日蓮聖人の御言葉、もしくは別冊『日蓮聖人の御言葉』の現代語訳を読み上げる。

四、唱題 経本を手元に置き、合掌し、御題目をお唱えする。

※太鼓等の法具により拍子を打つ。

五、回向 現代語で参列者と共に読み上げる。読み上げたのち、霊位の読み上げ等、法要の趣旨に応じて導師が付け

加えて回向を行う。回向の説明も行う。

① ただ今、お題目を唱え、法華経を読誦できましたことを、法華経の三宝に感謝し、その功德を、御恩を受けてきた全ての方々に感謝し、また亡き人々へ捧げます。

② 謹んで円満にして完全なる、歴史上かつて表されたことのないマンドラ御本尊の前で、題目を唱え、法華経読誦させて頂きました。(以下略)

## 六、帰依

※回向と同様に読み上げる。

① 正しい信仰生活のために

② どうかお題目の祈りを通じて、生きとして生けるすべてのものへの慈しみの心をいつも忘れず、皆さまと御一緒、正しき人の道を歩んでまいりましょう。

③ 生涯にわたって、ただ今いただいた、お題目の御縁を、大切に育てていくことをお誓いいたします。

南無妙法蓮華経(三唱)

以上

※適宜、法要の時間や内容によって讃嘆や誓言を加える。

次に、研究者が一部の檀信徒にのみ、口語訳による法要式を執り行い、二つの法要式について感想を述べてもらった。事例としては少ないが、その意見を以下に述べる。

【既存の法要儀礼に則った法要の感想】

・意味はわからない・ありがたい気がする・退屈である・慣れていない感じはする

【口語化を取り入れた法要の感想】

・なんとなく意味はわかる・一緒に読めない・長く感じる・慣れてない感じがする

以上の意見を踏まえ、現状では次のような課題があると考えられる。

■現代語化による法要式の課題と問題点

① 現代語による法要では、木魚などの法要具での拍子を打つことが難しく、一緒に読み進めていて、多くの場所で音が揃わない、バラバラになる、リズムがとれないという問題が生じている。↓統一性の問題

② 葬送儀礼の厳かさや、一体感、音楽性という点では、従来の真読による読経の方が荘厳性と厳粛さを得られると感じる。参列者が多い場合、拍子がないことにより全体の読経がずれ込み、調和性が失われてしまう場面があった。

③ 参列者と一緒に法要を行うという没入性、一体性も「聖なる時間」を共有するためには重要であり、口語化による法要には課題が多い。

一方で、伝統的な法要の方が「なんだかありがたい」という声も多く寄せられた。↓今回はその「なんだかありがたい」の正体について分析する。

## 四、考察

伝統的な法要儀礼は、参列者にとってその内容の理解が難しいという一方で、その儀礼そのものに一定の神聖性・厳肅さが担保されているという側面がある。一方で、法要式の内容を口語化した、現代語訳した場合、伝統的な法要式の荘厳性や調和性に対し、違和感が生じるという事が、一般化を阻む大きな課題の一つであると考えられる。

今回はその現代語化・口語訳と伝統的な法要式との間で、様々な「感覚的な違い」が生じる理由について、今回はソシユールの一般言語学講義にみられる、シニフィエ・シニフィアンという概念を用いて考察する。



シーニュ



日本語の場合



英語の場合

ソシユールによれば、言語には、シニフィエとシニフィアンという二種類の関係が付与されている。シニフィエとは、社会的・歴史的文脈により形成される、その地域独特の言語・音節が持つ意味内容であり、シニフィアンとは、辞書により他の言語にも翻訳可能なもの、文字そのものや音声自体を指す。

この概念によれば、言語そのものには、人類が普遍的に備え持つ概念、文化や世代、地域を越えて翻訳可能なものと、同時に特定の文明・文化を持つ共同体の中でのみ機能する、理解することのできる意味の二つが共存して存在し



ている。そして、言語を別の言語へと翻訳した場合、シニフィアンは継承されるが、シニフィエは継承されないのである。

例えば、「木」をTreeとして翻訳することは可能であるが、その「木」を日本人は「桜の木」としてイメージするかもしれないが、別の国では「杉の木」であったりする。そして、木に対する我々の感情の動きも別々であるが、おおよそ同質の言語・文化を有する共同体においては、その感情を共有することが可能であり、翻訳不可能な部分である。これは、共同体が持つ宗教においても強く相關すると考えられる。

この解釈によれば、伝統的な法要式の中で用いられる文言には、それまでに培われてきた伝統的な文化の醸成によって成立しているシニフィエが非常に多く付与されており、それらの個々の文言そのものに内在する「宗教性・荘厳性」を継承することの困難性の原因となつておられるのである。その一方、これらの伝統的な法要で用いられる文言からは、辞書的な意味・内容以外の点で、その文言が内包しているシニフィエを通じて、口語化された文言よりも、我々の宗教的・文化的共感性に強く作用していると考えられるのである。

たとえば、過去数年に発行された文化媒体のアニメや漫画等には、非常に難解な文字を組み合わせた固有名詞が多数登場する（例・鬼滅の刃「全集中の呼吸、壱の型」等）。その作品の固有名詞には、その難解な文字の羅列にも関わらず、その文字のシニフィエが持つ作用により、おおよそその雰囲気や、内容が小学生でも感じることができるのである。

つまり、語感が古い、内容がわからないという意見が多い漢文調・文語体を中心とした文字の組み合わせであつても、最新の文化である漫画やアニメと言った媒体の中ではその存在はむしろ積極的に受容され、時には最新の文化として取り扱われ、多くの共感を呼ぶことに成功しているのである。それではなぜ、法要式で用いられる場合は理解できない、退屈であるという意見になるのだろうか？それは、法要式を行う行為者と、それを受け取る受容者との間の

直接的な共感性にあると考えられる。

研究者が行った法要式ではなく、この法要式を作成した清瀬日草自身による法要式では、参列者との共感性は保たれ、成立している。何故ならば、それは行為者自身が、その内容のすべてに信仰の根拠を見出し、あらかじめ説明し、責任を追う上で執り行っているからである。一方、今回研究者が口語訳中心の法要式を行った目的は「口語訳によって、法要の内容を分かりやすく伝える」というものであった。しかしその理由はあくまでも参列者にとって、「聖なる時間を共有し、宗教的感動を呼び起こす」という原義に則ったものでなければならなかった。以下に過去の同様の研究事例での提言を引用する。

法要儀式は、本尊と仰ぐ仏とのかわりあいにおいて、その慈悲、加被を受ける仲立として法華儀礼がある―と考えておく〈仏〉と〈人〉の一如、感応道交を実現するドラマが法華儀式なのである（中略）したがって、まさに法華礼誦が本宗の全儀式の基調となるものであり、儀式作法が時代に対応して「簡素化」され種々の音楽、芸術の要素を撰取し改良されようとも、法華礼誦の精神が継承されなければならないのである。

（木村勝行（一九七〇）「法要儀式に関する諸問題」日蓮宗現代宗教研究所所報より）

葬儀式などで法要式に用いられる文言には、辞書的な意味・内容とは別にその共同体の歴史的文脈の中で培われてきた「荘厳性・宗教性」そのものが宿っており、それを行為者が確信して行うことにより、厳肅性が発揮されるといふ見方ができる。また、同様にその行為者の行為を通じて感化されることで対象者への宗教的共感が発揮されるのである。

そして、現代語・口語を中心とした法要式には、現在の伝統的な法要式の歴史的・文化的文脈により形成される

「神聖性・荘厳性」に比較して、執り行う側も、受け取る側も、心理的な面と知識的な面の二つの面で準備が必要であるという点に最大の課題があるのである。

## 五、結論と将来の展望

今回の法要式の現代語化、口語化により課題となる点、儀式の持つ荘厳性や厳肅性が担保されないという問題の原因と背景を、ソシユールの一般言語学を元に分析した。この分析によれば、伝統的な法要式には、その文言の意味そのものとは別に、過去の宗教、特に仏教教団が蓄積してきた膨大な宗教的、文化的背景が各文言に「シニフィエ」として付与されており、用語の辞書に対応した逐語的な翻訳による法要の意識のみでは、このシニフィエにより付与されている言葉そのものが持つ「荘厳性・宗教性」を継承・再現することが困難ではないだろうかという結論に至った。

我々はこれまで継承されてきた伝統的な法要式について、様々な批判から、その内容が難しいため、文言の意味が分からないため、現代社会の中で共感を得ることが困難となり、社会においてその意義が失われつつあるという認識をしがちである。しかし、伝統的な法要式で用いられる文言そのものもつ仏祖、宗祖より受け継がれた「荘厳性」や「神聖性」そのものは、現代でも喪失することなく付与され、時代の淘汰を乗り越え現在にまで法要式の中に保存されているのである。現代語訳・口語訳の試みの中で、これらのシニフィエを継承し発展させてゆくためには、我々はむしろ、法要式の現代語訳・口語訳の試みを試行錯誤しつつも、一方で、伝統的な法要式に込められた意義を深く理解し、参列者と仏祖三宝を繋ぎ、聖なる時間を共有する信仰の発露の場として、伝統的な法要式の内容を保存し、その荘厳性を積極的に現役世代に訴えていくという行為もまた、現代における法要式の一つの大きな挑戦・試みであると言える。

法要式の改革は急務とされている。一方で、我々は現在の置かれている状況を自覚しつつも一方を逐語的、機械的

に翻訳するだけではなく、その言葉に付与された固有の意味内容に向き合い、様々な模索の中で、参列者と「聖なる時間」を共有するための試行を続けていくことが重要であると考えられる。

【参考文献】

- 久松彰彦、(二〇一六)「葬送儀礼の現代における変容」、東京大学宗教学年報三三
- 角岡賢一、(二〇一〇)「仏教思想普及のための言語学的試み」、龍谷大学国際センター研究年報 第一九号
- 清瀬日草、(二〇一六)『法華経読誦要集(口語訳付)』、正東山 日本寺
- 戸次公正、(二〇一九)『日本語で読むお経を作った僧侶の物語』、明石書店
- 月刊住職、二〇一九年三月号 鴻上尚史、「仏教界に期待すること」、興山舎
- フェルディナンド・ソシユール著 影浦峽・田中久美子訳 (二〇〇七)「一般言語学講義」、東京大学出版
- 丸山圭三郎、(一九八二)「ソシユールの思想」、岩波書店
- 木村勝行、(一九七〇)「法要儀式に関する諸問題」、日蓮宗現代宗教研究所所報